

勘違いからマリアージュ

## 目次

第一章	勘違いの結婚	4
第二章	略奪婚？	49
第三章	遠距離恋愛開始	77
第四章	結婚式	248

## 第一章 勘違いの結婚

1

「おめでどう！ 幸せにね」

派遣先での最後の仕事を終えた中村天音は、送別会の場でなぜか祝福されていた。

大手菓子メーカー営業部の同じグループに所属する総勢二十人ほどが、口々にお祝いの言葉をくれる。

天音はその光景を他人事のように眺めながら、流されるままに酒のグラスを合わせた。

「結婚かあ。いいなあ」

隣に座った同い年の社員が、うっとりとして天音を見つめている。

「会社の方針が変わって派遣社員さんたちの契約を終了するって聞いた時は心配したけど、みんな次の勤め先が決まって安心したわ。それに、中村さんは寿退社だし。心置きなく美味しい酒が呑める！」

ビールジョッキを片手に、どこからかやってきた先輩社員が声を張り上げる。

——多分、すでに相当酔っている。

「いや、まあ……あはは」

天音が顔を引きつらせて乾いた笑い声を上げて、気にする人はいない。

共に働いてきた派遣社員たちは、それぞれの新しい仕事先の話題で盛り上がっている。さっき天音にお祝いの言葉をくれた彼女らは、自分の結婚に対する夢を語り合っていた。

天音は周りをぐるりと見渡してから、手に持っていたチューハイを呷る。

——結婚の予定どころか、久しく彼氏だっていない。それなのに、天音はなぜか寿退社すると勘違いされてしまっている。長年憧れていた上司にも誤解され、何度否定しても誰にも信じてもらえないまま、今日を迎えてしまったのだ。

グラスに残っていたお酒を喉に流し込み、深い深いため息を吐く。

——なにがどうしてこうなった。

2

天音が寿退社すると勘違いされたきつかけは些細なことだった。

あれは確か、派遣社員仲間の女五人で開いた飲み会の席。会社の方針が変わり、契約期間満了で

退職することが決まった直後だったと思う。

天音は大手菓子メーカーの営業部で、約三年間派遣社員として働いていた。

契約は終了するものの、派遣会社と今勤めている会社との間では前から話が出ていたらしく、次の勤め先はすぐに手配してもらえた。だから天音たちはなんの心配もなく、別れを惜しむことができるのである。

天音にも次の職場の紹介はあったのだが、これを機に退職することにした。

「天音は、結局これからなにをするのよ？」

目の前に座る美香子が聞いてくる。

天音は箸を止めて顔を上げた。

「新潟に帰って、家業を手伝うの」

天音の実家は老舗の和菓子屋だ。

店には後継ぎの兄がいるし、普段はお義姉さんも手伝ってくれているので人手は足りている。しかし今、義姉は妊娠中と思うように動けない。

そこで、隠居していた母が店番に立ち始めたのだけど……腰を痛めて即入院。和菓子は意外と重し、中腰で動くから腰にくるのだ。

人を雇おうにも頑固で職人気質な父の人选が厳しく、バイト探しは難航し——そこで天音に白羽の矢が立った、というわけである。

給料をくれると言うし、少しの間実家でゆつくりしようかなと、天音は派遣会社からの仕事を断

り、数ヶ月ほど田舎に帰ることにした。

「なるほど」。天音は来月から北陸かあ。いいなあ」

「いいなあって、実家だから、別にそんなにいいもんじゃないよ。それより千佳はなにするんだっけ？」

本当におもしろい話でもないのに、隣に座る千佳に水を向ける。

「私ほね……」

あつという間に話題は、千佳の新しい派遣先へと移る。

天音も、数ヶ月は実家で店番をするが、すぐにまた新たな派遣先でパソコンを睨み付ける日々に戻るのだろう。

——代わり映えのしない日々の繰り返し。それは安心できるものだが、少し退屈かもしれない。なにか生活が変化するような刺激があっても楽しいだろう。そんなことを考えながら、天音は何気なく呟いた。

「田舎で結婚するのもいいなあ」

今時、専業主婦をやっているほどに余裕はそうそうないだろうけれど、今よりはゆつくりできるかも。とはいえ、それは非現実的な選択だ。そんな風に自分を甘やかしてくれる男性が、どこにいるんだって話である。

一人で脳内ツツコミをしていると、美香子が驚きの声を上げる。

「え？ そうなの？」

なぜそんなに目を見開いて尋ねてくるのかと、一瞬不思議に思った。

しかし『田舎で結婚もありなのか?』と問われれば、答えはYESだ。多少違和感はあるものの、天音はそれを無視してしゃべる。

「そうそう。田舎に腰を落ち着けてね」

天音が頷くと、美香子は「うわあ」と感嘆の声を上げた。それから彼女は「どんな人?」と聞いてくる。

——突然恋バナを始めるなんて、随分話題が飛ぶな。それになんだか聞き方も妙だ。

でもまあ、女子が集まれば恋バナに花が咲くのは自然な成り行きだろうと、天音は苦笑しながら違和感を勝手に打ち消す。……つまり、『どんな人と結婚したい?』と聞いているのだろうか。

色々不可解な点はあるものの、酔っ払っているため言葉足らずになっているのだと判断し、構わず会話を続けた。

「ちょっと怖いのに優しくして、いざという時には頼りになるような人かな」

そう言いながら、一人の男性を脳裏に浮かべる。

牧戸大輔さん——尊敬する上司であると同時に、胸が苦しくなるほど好きになってしまった人。

仕事に対してかなり厳しいけれど、面倒見がよく、ふとした時に優しくして。営業担当がそれではないのかと心配になるくらい、愛想が悪い。しかし、堅実な仕事ぶりで周囲からの信頼は厚かった。

短めの前髪をうしろに流す仕草は、凛々しいという言葉がよく似合う。

笑うとたれ目になって、ちょっと幼く感じられるところにも、胸がドキドキする。

天音の彼への想いは、三年という月日を経て、もう、淡い恋心で済ませられる段階ではなくなっていた。

しかし彼は、天音の想いにまったく気付いていない。つまり、脈なし。叶うはずのない恋である。契約終了は、ある意味チャンスかもしれない。どんなに抑えつけても溢れてしまいそうな想いに、区切りをつける時がきたのだ。

天音は田舎へ帰るし、なんの接点もなくなる。

——もしも、それでも忘れられなかったら……

絶望的よね、と天音は笑った。

「いいなあ! 私もそんな人に出会いたい!」

美香子の言葉に、天音は泣きそうになりながらも笑う。

「そうだね」

振り向いてもらえないなら、出会わなければよかった?

彼との思い出がすべてなくなるのと、叶わぬ想いを抱えながら生きていくのとでは、どちらが辛い?

そんなことを、ぼんやり考える。

その後も美香子や周りのみんなにあれこれ聞かれた。けれど天音は笑顔を作ることに一生懸命で、会話の内容をまったく覚えていない。

ただ曖昧に笑い、その場を取り繕うような言葉を発していただけ。みんながやけに盛り上がっている理由を、考えもしないまま――

3

飲み会の一週間後。

天音は給湯室に入ったところで、数人の女性社員たちから声をかけられた。

「中村さん、結婚するんだって?」

「――はあ!? しませんよ」

いったい、なんの冗談だ。まったく予定はない。それどころか、ここ三年ほどは、ずっと一人に片想い中だ。短大在学中に数ヶ月付き合ったのが、二十五年の間で唯一の経験で、思い当たる節もない。

「またまた。恥ずかしくて隠してるの?」

「もう、おめでたいことなんだから隠さないで!」

――いつ、どうしてそうなった。

天音があっさり否定したというのに、彼女たちは盛り上がっていて聞いてくれない。

「唯一、次の仕事が決まっていなかった派遣社員は、永久就職先を見つけた」と、みんなが沸いて

いる。

……誰がうまいこと言えと!

第一、次の仕事が決まっていなかったわけではない。田舎に帰らなきゃいけなくなって断つたのだ。そう説明しても、反応は決まっていた。

「ああ、実家のほうで結婚が決まったんだもんね」

そうではなくて……!

その後、噂の出所を探っているうちに、派遣仲間との飲み会の時に自分が紛らわしい受け答えをしたのが原因らしいとつきとめた。

だから訂正するべく実家の事情を話そうとしても、「大丈夫、大丈夫。私たちに気を遣わせないように黙っていたんでしょ? わかっているって」と、話をまとめて切り上げられてしまう。

それでも天音は、「違う」「そんな予定はない」と言い続けた。しかし噂は広まりすぎて、否定すればするほど、からかいの種を増やしているように感じられ、疲れてきた。

決して肯定することはなかったのだが、ある日電話を取ったら――

『ああ、中村さん? 寿退社だってね、おめでとー!』

取引先の人からも、お祝いされる始末。いったいどこまで噂が広まっているんだと、呆れ返ってしまう。

その頃には天音の中に、『もういいや』という諦めの気持ちが芽生えていた。

どうせ退職はするのだ。その後に結婚しようがしまいが、誰にもわからないだろう。できることならば大輔にだけはこの噂を知られず、静かに最後の日を迎えたいと思っていたのに――

電話を終えた天音のもとへ、大輔がやってきた。

「結婚するんだってな。直属の上司としては、お前の口から最初に聞きたかった」

苦笑しながらそう呟いた彼を見て、天音は俯くことしかできない。

――言うわけはないではないか。事実じゃないし、そんな根も葉もない噂を知られたくなかったのだから！

あまりのシヨックに天音は、ただ「すみません」としか言えなかった。

すると大輔は軽く笑う。

「冗談だから。おめでとう」

そう言つて去つていく彼の姿を見て、天音は作り笑いもできないほど傷ついた。

そんな風に優しく祝福なんかしてほしくない。天音が誰と結婚しようが平気だと突き付けられた気がして辛かった。

俯いたままトイレまで行き、個室に籠つて嗚咽を堪える。

恋心を、完全に打ち碎かれなまままでいたかつたのに。

それから天音は、寿退社の噂を否定も肯定もすることなく過ごしたのだった。

## 4

そして迎えた、最後の勤務日の金曜。

終業後に営業部のみんなが、天音たち派遣社員の送別会を開いてくれた。

そこでも天音は、浴びるほどの祝福の言葉を送られ、言いようのない罪悪感に襲われる。

自発的に嘘をついたわけではないが、最後まで否定しなかつた自分も悪い。

数日前、大輔にお祝いの言葉をもらつてしまい、自暴自棄になつて諦めた自分が恨めしい。

天音はため息をついてから、室内を見渡す。それぞれ数名ずつのグループを作り、話に花を咲かせている。

そんな時、つい視線は大輔を探してしまう。こんな風に彼を目で追うのも、今日が最後になるだろう。

大輔は天音の対角線上、入り口付近の席に座っている。打ち合わせが長引いて遅れてきたため、着いてすぐ女性社員たちに捕まつたようだ。

彼の姿をぼんやり眺めていると、一瞬だけ目が合う。

「……っ！」

気のせいかもしれないけれど、甘く、どこか切なそうな顔で、わずかに微笑んでくれたような気

がした。

天音はこの会社に派遣されてすぐの頃から三年間、ずっと大輔の下で働いてきた。その部下との別れを、彼も少しは寂しく思ってくれているのだろうか。

天音の胸に、言いようのない寂しさが込み上げる。

——これはもう、呑むしかない。呑んで呑んで、前後不覚になるまで呑んで、潰れてしまえばいい！

そうして天音が一人で呑んだくれていると、幹事らしき人の声が響く。

「みなさーん、一次会はそろそろお開きです！ 二次会に行く人は次の店へ〜！」

それを聞いて立ち上がったら、少しよろけた。

おぼつかない足取りで、外に出ようと歩き出す。けれども道がわからない。来た時は、派遣仲間たちと一緒にだったから、よく覚えていなかったのだ。そうして周囲を見回すも、誰もいない。

天音は仕方なく、辺りをうろつく。なんだか体がフワフワして、雲の上を歩いているみたいだ。

「あの、誰かお探しますか？」

声が出たほうを振り返ると、一人の店員が立っていた。

ちようどいい。この人に聞こう。

「誰……誰というか、私が探しているのは、えーと……」

頭がボーッととして、言葉が出てこない。

「ほら！ あの、えーつと……あれです、あれ！」

身振り手振りをしながら、言葉を探していたら——

「中村！」

艶のあるバリトンボイスが響く。

その声は、天音が懂れてやまない大輔のものに似ているけれど、そんなはずはない。彼がわざわざ天音を探しにくるわけがないし……

もしかしたら、これは夢？ 三年も片想いしてきた相手との別れが、あまりにもあつさりしたものだっただけが悲しくて、自分に都合のいい夢を見ているのかもしれない。

そう考えるのが、一番しっくりくる。

……夢ならば、少しは勇気が持てるだろうか。

彼が脇を支えてくれたので、天音は遠慮せず寄り掛かって甘えた。

——その後のことは、途切れ途切れにしか覚えていない。

たしか誰かと一緒にタクシーに乗り込み、どこか大きなベッドのある部屋へ行った気がする。

『天音。抱くよ？』

蕩けるように甘いささやきを、耳に吹き込まれる。

——こんな風に天音を呼ぶのは、いったい誰だろう？

大輔の声に似ているが、そんなはずはないと考えを打ち消した。彼から下の名前で呼ばれたことはないし、やっぱり夢を見ているに違いない。



酩酊状態だった天音は、状況を深く考えず、気持ちに任せて想いを口にする。  
『牧戸さん、すき』

夢の中ならば、想いを告げてでも許されるはず。

長年、胸の奥に封じ込めていた想いを吐き出すと、もう止まらなかつた。

『好き。大好き』

うわ言のように繰り返し、与えられる熱に翻弄されて——天音は満ち足りた気持ちで眠りに  
いた。

『この夢が、ずっと覚めなければいい』と願いながら。

## 5

——そんなことを願ったのは、どこのどいつだ。ああ……昨夜の自分を殴りたい。

翌朝。

目を覚ましたはずの天音は、まだ夢の続きを見ているのかと思つた。

ベッドに横たわりながら眺めているのは、見覚えのない天井。完全に昨晚の続きである。

……昨晚の願いを撤回したい。いや、この状態が夢になるならば、夢であってほしい。

どうにかして、昨晚のことは夢だったというオチにならないものかと天音は痛い頭を抱える。  
しかし無情にも、次々と現実が突き付けられる。

頭を動かして辺りを見回すと目に入るのは、ベッドサイドの椅子の上に掛けられた天音の服。ご  
丁寧なことに、ブラとショーツまで一緒だ。

——これはもしかしなくても、「一夜の過ち」ってやつだろうか。

いやいや、まだそうと決まったわけじゃない。万が一の確率で、ヤッてないという可能性も……  
今、天音は全裸だけれど。

それに、下半身が重くて怠いけれど。とんとご無沙汰だったというか、過去に一度しか経験のな  
い体は、少々どころか、随分な痛みを訴えていた。

呑んで潰れて一夜の過ち。

自分がそんなことをしてかすとは思わなかつた。

——ところで、いったいここはどこだろう。誰かのマンション……インテリアの雰囲気からして、  
男性の部屋のような。

相手にも、まるで心当たりがないし本当に困つた。

「あ……つたま、いたい………」

それに、気分も悪い。明らかな二日酔いだ。

——自分はバカなんじゃないだろうか。

好きな人がいるというのに、ゆきずりの相手と一晚過ごすだなんて。

相手の顔を見ずに逃げ出したいと思うけれど、頭が痛すぎてすぐには動けそうにない。それでも、どうにか服を着ようと、ベッドに寝たまま椅子に手を伸ばして服を引っ張る。すると、椅子ごと傾いてしまった。  
「がたんっ！」

大きな音と共に服が散らばる。同時に、部屋の外から足音が近づいてきた。天音は慌ててシーツを体に巻き付けた。服を着ることもできず、逃げることもできず、ただドアを見つめる。

「起きたのか？」

ガチャツとドアが開き、現れたのは――

「ま、ま、まままま……っ！」

なんと、大輔だった。

思ってもみない人の登場に、天音はただ口をパクパクさせ「牧戸」の頭文字の「ま」を発音することしかできない。

まさか大輔が昨夜の相手!? 本当に、信じられない。

真っ白なTシャツにジーパンを穿いた彼は、驚きすぎて動けない天音の顔を覗き込んだ。

「気分悪いのか？ 水を飲め」

ベッドサイドに座って、天音を抱き寄せようとする。

「はあああああ!？」

天音はようやく覚醒し、思わず大きな声を出してしまった。自分の声の大きさが頭に響き、痛みを悶絶する。

「なんだ、その驚きようは」

彼を見上げると、お怒りモードだった。

「その反応……まさか昨晩のこと、覚えてないのか？」

目を睨めて聞いてくる彼に、どうにか「覚えていますとも！」と誤魔化したい気持ちが湧き上がる。けれど、誤魔化せないという確信もすっかりとあった。

――それにしたって、なにがなんだか！

「申し訳ございません……」

本当に。

なにをやらかしてしまったのだろう。

天音は、シーツを体にグルグル巻きつけながら、昨日の自分を振り返る。

――しかし思い出せるのは、居酒屋の隅っこの席でキャパオーバーするまで一人で呑んだことくらい。

そういえば帰り際に大輔によく似た声の人が現れて、一瞬支えてもらったような気もするが、あれは夢か現実か。曖昧で判別がつかない。

甘すぎる大輔の声が蘇ってきて、あれが現実であるはずがないと天音は一人顔を熱くした。

仕方がないので、天音は酔っ払った自分の行動を予測する。

最後だからと、大輔に挨拶をして絡んだのだろうか。

さらに、一度だけでいいから抱いてくれとせがんだのかもしれない。

そして、断られたので襲った、と……

——想像して、血の気が引いた。

好きという気持ちがあふれて、無理矢理襲ってしまったんだ、そうに違いない！

自分の鬼畜な行動を想像し、ふるふる震えながら大輔を見上げた。

そんな天音を、大輔は首を傾げつつ見下ろす。

「天音？」

突然、下の名前で呼ばれて心臓がはねた。

大輔はいつも天音のことを「中村」と呼んでいたはず。こんな風に、恋人のように呼ばれたいと思っていたけれど、現実にはもちろん一度もなかった。

もしかして……まだ自分は夢を見ているのだろうか。いや、そんなわけない。

天音は、ますます意味がわからなくなった。なぜ彼は、天音をこんな風に呼ぶのだろうか。

……それにしても、名前を呼ばただけで、これほど胸が高鳴るのに、昨日の夢の中の自分とは大きく大輔に迫ることができたものだ。

そんなことを考えながら百面相している天音を見て、大輔はため息を吐く。

「大丈夫だ。心配しなくてもいい」

——え、それって、ヤツてないってことですか!?

下半身には行為の証とも言える違和感がある。しかし大輔がそう言うなら、すべてに目をつぶってそう思い込もうと決意する。

昨夜のことをなかつたことにされるのは、少し胸が痛む。しかし、彼にとって不本意な行為だったに違いないのだから仕方ない。

天音は自らの胸の痛みを無視して、大輔を見上げる。すると、彼は真剣な顔で頷いた。

「昨晚のことについて、お前の結婚相手には俺がきちんと話そう」

「はっ!？」

——あつたま、痛っ……!!

思わず大きな声を出し、また同じ失敗を繰り返して悶絶した。

いや、悶絶している場合ではない。

「いえ、結構です。大丈夫です」

いろんな意味で痛い頭を片手で押さえながら、それでも否定しようと手を横に振った。

天音には、昨晚のことで話をつけなくちゃいけないような結婚相手などいないのだ。影も形もない。

しかし大輔は天音が否定したことを、別の意味に受け取ったらしい。

「なんだと？ まさか昨日のことを、一夜の過ちにするつもりか？」

彼の声音が怒りの色を帯びたと思った途端、体に巻き付けていたシーツを剥ぎ取られてしまった。

「ひゃああああつ!!」

床に投げ出されたシーツを一生懸命追いかけてようやくしたけれど、天音は大輔にベッドへと押し倒された。

両手首をベッドに縫い付けられて、腰の上には大輔の体がかかっている。彼は服を身につけているというのに、天音はショーツさえ穿いていない。

朝日が入る明るい部屋で、片想いの相手に裸を見下ろされているだなんて……！  
恥ずかしさに、全身の熱が上がってしまう。

どうにか動いて少しでも体を隠せないかと思っても、しっかりと押さえつけられていてびくともしない。

天音の抵抗など意に介していないように、大輔は唇を天音の耳元に寄せる。

「天音」

先ほどまでの怒りを帯びた声ではなく、甘さを含んだ声で天音の名前を呼ぶ。

「は、はい……」

その声に逆らえるはずもなく、天音は大輔を見上げる。

恥ずかしさから目に涙が滲んでしまっていて、彼の姿が少しぼやけていた。

おとなしくなった天音に微笑んで、彼は言う。

「昨夜はあんなに、俺のことを好きだ好きだと言っていたらどうだろう？」

大輔の微笑みに目を奪われそうになったけれど、そんな場合じゃないと気が付く。

「あっ……あんなに!？」

——たしか夢の中で、そんなことを言った気がする。つまり……あれらはすべて、現実つてこと!?

あんなに大盤振る舞いで、好きだ好きだと言いつづけたってこと!?

好きという気持ちは本心だが、直接想いをぶつけるのは恥ずかしすぎる。しかも連呼していたなんて、居た堪れない。

信じたくなって、天音はぶんぶんと首を横に振った。

もう、二日酔いで気分が悪いとか頭が痛いとか言っている場合じゃない。

幸いなことに、大輔は昨晚の痴態にこれ以上言及する気はないらしい。

ただニヤリと笑って、なにかを企んでいるような顔をした。

「天音が覚えてないとしても、なかったことにはしない」

するりと、熱い手が天音の腰を一撫でする。

昨夜の情事を体が覚えているのか、びくんと大きく反応してしまった。

ようやく解放された手で胸を隠すけれど、今さらだと言わんばかりに大輔は笑う。

そして、天音の反応に気をよくしたららしい大輔は、ぺろりと自分の唇を舐めた。

「天音は、俺のことが好きなんだろう？」

改めて聞かれ、どう答えていいのかわからない。

——これは、どういう状況？

天音は昨日、彼に告白してしまったのだろうか。あんなに、あんなに、なんにも言わず退社しよう

と誓っていたのに。脈がないのはわかりきっていたから、もしもまた会えた時に、なんでもない顔をして笑い合えるように、って……

それにしても、大輔はなぜ天音の気持ちを確認するようなことを聞くのだろう。そもそも寿退社すると思われていたはずである。結婚相手がいる（と勘違いされている）天音と、なぜこんなことを……？

大輔はそんな不誠実なことをするタイプではないし、まったくもって意味がわからない。次から次へと疑問が湧いてくるものの、一つも答えは出ないまま。

昨晩、自分たちはどんないきさつで一夜を共にしたのだろうか。

——知りたい。でも、怖い……

天音が戸惑いながら視線を揺らすと、彼の瞳がまた怒りの色を帯びる。

「ずっと俺のことが好きだったんだろ？ それなのに他の男と結婚しなけりゃならなくて、困ってたんだろ？ 俺が守ってやる。好きでもない相手と結婚する必要なんかない」

彼は怒りを滲ませた声でそう言っつて、天音の口を唇でふさぐ。

——キスされた！

……と、思った次の瞬間には、にゆるりと舌が口内に入り込んでくる。

なんだか今、すごいことを言われた気がするし、いきなりこんな濃厚なキスをされたから、ビツクリして頭はフリーズ状態だ。

しかし彼は、そんな天音に構わず、彼女の舌を味わうように舐めた。

驚きに縮こまっていた天音の舌を、容赦なく吸い出す。

息継ぎさえままならないほど激しいキスをされ、天音は苦しくて大きく口を開けた。すると彼は、好都合だというように、さらに奥へと舌を伸ばしてくる。

天音はもうどうにかなくなってしまいそうで、ダメだと首を横に振った。しかし彼の手は、天音の体の線を辿って、腰から上へと撫でる。

「ひっ……んっんっんっ」

普通だったらくすぐつたいと感ずるはずなのに、ぞわぞわと背筋を這い上がる感覚に震える。

「ほら。体は快感を覚えている」

大輔は嬉しさを隠さずに言っつて、天音の頬にキスをする。

「素直に感じるよ。——気持ちいいだろ？」

すでに尖っつてしまっつていた乳首をきゅっつと摘まれて、天音は反り返っつて嬌声を上げた。

「ああああっ……んっんっんっ！」

「なかつたことにしようなんて、許さない」

頂をコリコリと捏ねたり押し潰されたりする感触が、だんだんもどかしくなつてきた。無意識のうちに、天音の腰が揺れる。

それに気付いた大輔は、天音の大好きな笑顔で甘くささやいた。

「こっちも触っつてほしい？」

天音の下半身に伸びてきた手が、足の間にすりと入り込む。

そうして大輔の指は、天音の秘所を優しく撫でる。

昨夜の残滓もあるのか、天音のそこはもう潤っていて、大輔が指を動かすたびにクチクチと小さな水音を立てた。

「まき、……つと、さあん」

快感の波に流されてしまいそうになりながらも、必死に踏みとどまって彼の名を呼んだ。

彼に触れられること自体は、構わない。

長年恋い焦がれていた相手に甘くささやかれ、間近で温もりを感じ、こんな風に求められて……まるで夢を見ているみたいに幸せだった。

だけど、結婚について誤解されたまま関係を持つのはよくない。そんなの、二股をかけている状態でセックスするようなものだ。とても不誠実な行為だと思うし、彼にもそういうことを良しとしてほしくなかった。

天音は、不埒に動き回る大輔の腕を両手で押さえ込んだ。

「お願いです。まっ……待って、ください」

天音は、必死で大輔の手を押しとどめる。

すると、大輔の眉間に皺が寄った。

「嫌だ、待たない。天音に、望まない結婚なんかさせない。俺のことが好きだと縋り付いて、俺の手でこんなに感じている天音を、他の奴になんか渡さない」

……どうやら大輔に、なにか大きな勘違いをされている気がする。彼がなぜそう思うに至ったか

詳しく聞きたいが、それを問う間もなく足の間に彼の体が割り込んできた。

そして彼は天音の手を払い、太い指を二本同時に、天音の秘所に差し込む。

ぐちゅつ。大きな水音が室内に響く。

彼の指遣いに、さつきまでの優しさはない。荒々しく天音のナカを暴いていく。

「つやあ……！　ちがつうのお……！」

彼の指が出たり入ったりを繰り返すたびに、ビクビクと揺れる体をどうにかしてほしい。

天音は思わず、目の前にあつた大輔の頭を掴んだ。

しかし大輔は天音に構わず、触れるだけの軽いキスを胸に落とす。

そのかすかな刺激にさえ、今の天音は震えてしまう。思いがけず、彼に向かって胸を突き出す格好を取ってしまった。

「なに？　こつちもいじめてほしい？」

大輔は満足げに息を吐きながら、天音の胸の先端を口に含んだ。

「ふあっ!?　は、つああんっ……！」

大輔の舌が、コロコロと先端を転がした。

秘所に差し込まれている指は、さらに激しさを増す。

天音は迫りくる強烈な快感の波に、必死で抗う。

「やあああんっ。牧戸さんっ……だめえ」

一旦、この快感の嵐を止めてもらわないことには話もできない。

まずはきちんと事情を話して、身の潔白を証明できてから彼を受け入れたい。必死で彼を押しとどめようとするけれど、その態度は逆に大輔を煽ったようだ。

「嫌じゃない。イイって言えよ」

ぐちぐちと次第に大きくなっていく水音に、天音は理性を保てなくなっていく。

「ちがっ……!! 聞いて!」

天音の目から流れ出した涙を見ながら、大輔は苦しそうな顔をする。

「事情はもう十分わかってる。天音にはもう、辛い想いはさせない。辛いことは俺がすべて引き受けるから、昨日みたいにもっとしてって言えよ。俺に溺れるよ!」

天音の足が、ぐいっと突然持ち上げられる。それと同時に、彼女のナカで暴れまわっていた大輔の指が引き抜かれた。

しかし、ホツとしたのも束の間で、大輔の顔が天音の秘所に埋まる。

「やっ……!! 嘘、だめだめっ……んあっ、だっ、めえ!」

彼が、天音の花芽にキスをする。

天音は、恥ずかしさのあまり大輔の頭をポカポカと叩く。しかし彼は、そんな天音を無視して秘所に舌を這わせ始める。

花芽を優しく転がすように舐めて、ぷつくり膨らんだそこに、愛おしげにまたキスをする。

そして舌は鬚を掻き分けて、蜜が溢れるその場所へと到達する。

「あっ……あっ、あっ……そこ、……そこ、やああ」

——そこがいい。もっとして! と口走りそうになるのを押しとどめて、天音は必死に首を横に振る。

快感で頭がクラクラする。

もう誤解などどうでもいいから、イカせてとねだってしまいたい。

大輔も、そんな天音の心情を察してか、花芽にもう一度キスを落として顔を上げる。

「嫌? やめてもいいの?」

意地悪な言葉に、天音は涙を滲ませる。

彼は天音の両太腿を肩に担ぎ上げ、親指で秘所を広げたり閉じたりさせた。

そのたびに、くちやつくちやつと卑猥な水音が鳴る。それはまるで、天音が欲しがっている心の声そのものようだ。天音は堪らず、羞恥に顔を熱くする。

「いじっ……わる、ですっ……!!」

天音はもう、全身が熱かった。多分、顔も真っ赤になっていて、天音の気持ちは大輔に手に取るように伝わってしまったているだろう。それが恥ずかしくて、天音はわざと大輔を睨んだ。

——本当は、体中がぞわぞわして、触れてほしくて仕方がない。

しかし唇を引き結んで大輔を見上げた。すると大輔は「参った……そんな可愛い顔するなよ」と小さく呟いて、天音に優しいキスをする。

「天音、好きだよ」

大輔は両手で天音の頬を包み込んで、コッソンとおでこをぶつける。

天音が視線を上げると、目の前には自分を見つめる真剣な目があった。

さつきにも増して、天音の顔に熱が集まる。

天音は一瞬、夢を見ているのかと思った。

——牧戸さんが、私を、好き……？

信じられない。彼が天音のことを好きになるはずがないと諦めていた。たまに優しくしてくれることはあったけれど、年の差もあるし、ただの若い部下としか思われていないと思っていた。

それに彼には寿退社すると勘違いされ、トドメを刺されてしまったとばかり……

目を見開いて、大輔を見つめ続ける。すると大輔は、苦笑を漏らした。

「今、初めて聞いたみたいな顔するなよ。昨日の記憶、まったくくないんだな」

天音は震える手を、彼に向かって伸ばした。

特になにかをしようとしたわけじゃない。ただ、ここにいる大輔が本物かどうか、触って確かめたかっただけだ。

大輔は伸びてきた天音の手をとって、掌にキスをする。

その感触にびくりと体が震えて、忘れそうになっていた疼きが戻ってくる。

「天音。ちゃんと責任は取る。望まない縁談も、俺がぶち壊してやる。だから、俺を受け入れて？」

……ん？ 「望まない縁談」 って、なんのことだろう。

そういえば、先ほどもそんなことを言っていた。

天音が他の誰かを好きになり結婚するわけではない、というのはきちんと伝わっているようだが、

まだ勘違いされているような……

それなりに大きな違和感はあったが、天音はもう胸がいっぱいだった。

彼が言っていることの意味をしっかりと捉えられないまま、頷いてしまう。

好きな人が、自分を好きだと言っている。

決して叶わないと思っていた恋が、実った。

知らず知らずのうちに涙が滲んでいったようで、大輔が困ったような顔をして、天音の目元に唇を寄せる。そうしてキスで涙を吸い取ってくれた。

「いくよ？」

そう言ってから、ずんつと大輔自身が入ってきた。

少しの痛みと……圧倒的な快感。

ジンジンと疼く秘所は、大輔の熱さを丸ごと呑み込んで、嬉しそうに絡みついていく。

頭がうまく働かないまま、突然入れられてしまったのに、天音は悦びだけを感じた。

懂れてやまなかった大輔が、自分を求めてくれていた。彼も自分のことを、憎からず想ってくれている……と考えるのだろうか。

——嬉しい、嬉しい。嘘みたいだ。

一度だけでも、こんな風にされてみたいと思っていた。格好悪く纏るのが恥ずかしくて、諦めのいいふりをして誤魔化していた。プライベートの連絡先さえ聞かずに別れるつもりだった。

涙で滲んだ視界には、天音を熱く見つめる大輔が映っている。



「天音、愛している」

「わた……しも」

きちんと話をしなきゃいけないことなんか吹っ飛んで、大輔の告白にだけ意識が向かった。彼の言葉と表情を見ていたら、天音のナカが、きゆうつと収縮する。

天音の返答に満足した様子で笑った大輔は、啄むようなキスを降らせた。キスをされるたびに、胸がキュンキュンして、体の奥がうごめく。

「そんなに……締め付けないでくれるか？ もたないだろ」

ため息交じりに大輔が言うけれど、天音にはなんのことかよくわからない。

とにかく気持ちよくて、彼が自分のナカにいることをもつと感じたくて、天音は大輔に抱き付いた。

「好き」

——それは、言わないと決めていた言葉。

彼の胸の中で言うことができるなんて、思ってもみなかった。

「好き。——好き」

口にできることが嬉しい。本当は、彼に伝えたかった。

拒絶されるのが怖くて、言わないほうがいいと、無理やり気持ちを押し込めていた。

好きの気持ちが溢れすぎて、天音の目からぼろぼろと涙がこぼれた。

すると大輔の眉根が苦しそうに寄る。

次いで彼は、小さな声で叫んだ。

「天音——もう、手加減できない。悪いっ……！——」

一気に奥まで突かれて、一瞬息が止まる。そして、彼が引き抜かれたと思ったら、またすぐに入ってくる。

「あつ、あつ……！ だめ、はげしっ……！——」

背筋に快感が走り、全身の毛が逆立つ。

天音は、大輔の背中に必死で掴まっていた。そんな天音を、彼は逞しい腕でしっかりと抱き締め、激しく抽送する。

しばらく続けた後、ひときわ強く腰を打ち付けた。

その瞬間、天音の体をビリッと電気が走り抜ける。すぐに全身の力が抜けて、ベッドに体を投げ出した。とてつもない気怠さが襲ってきて、もう指さえも動かしたくない。

そんな気持ちでぼんやりしていると、大輔がくくつと笑う。それから、ずるりと彼自身を引き抜いた。

その感触をダイレクトに拾ってしまった天音は、急激に恥ずかしくなる。重い腕をなんとか動かして、シーツを手繰り寄せて体を隠した。

「今さら」

そう大輔に咬かれるけれど、羞恥心をなくしたら終わりだと思う。

天音がそんなことを考えていると、大輔は、ほう、と大きく息を吐いて言う。

「天音も俺が好きなんだろう？ だったら、好きでもない男との結婚なんてするなよ」

——そういうえばそうだった。その誤解、解かなきゃ！

天音は目を見開いて、慌てて首を横に振りながら、口を開こうとした。

しかし彼女の言葉を聞く前に、大輔は天音をまたベッドに縫い付ける。

「——なんで？」

その声は明らかに怒りを含んでいる。今の天音の態度が、また大いなる誤解を生んだのだとわかった。

「あっ！ ちょ、待ってください！ 結婚は違うの！」

慌てて叫ぶけれど、残念なことにまたも言葉が足りなかったようだ。

大輔はさらに怒りを深くした様子で、イッたばかりの秘所に指を差し入れてくる。

「んあっ。もう、だめえ。結婚相手は……ああっ！」

『いないの』と続けようとしたのに、太い指が的確に天音の快感を引き出して、しゃべり続けることができなかった。

「セックスと結婚は別とでも言うの？ 俺たちはこんなに愛し合っているのに。……すべてを捨てて、俺についてこいよ」

——違う！ 大きく違う！

「ちが……ちがう、から、もう抜いてえ」

はくはくと一生懸命に息継ぎをしながら話す天音を、大輔は辛そうな表情で見下ろす。

「お互い同じ気持ちで、体の相性だつて最高なのに」

とにかく、ゆっくりと話をさせてくれれば簡単に解けるはずの誤解なのに、どんどん根深くなつていつている気がする。

「それでもまだ、俺以外の奴と結婚するつもりなのか？」

耳元に唇を寄せてしゃべる彼の声に、胸の高鳴りが抑えられない。

もう、話の内容が頭に入つてこない。彼の甘いささやきと吐息のせいで、天音の体はまた快感に支配されていく。またもナ力で激しく動き始めた指に翻弄された。

耳をかじられて、天音は震える。

「それ、だめえ」

その様子を見て、大輔はニヤリと笑った。いたずらを思い付いたような顔だ。

——その表情、好き。

涙で霞んだ視線の先にいる彼を、きゅんとしながら見上げる。

「俺以外ではもう満足できなくなるくらい、快感に溺れさせてやる」

この言葉に、天音は固まる。

——これ以上の快感って……！！

戸惑っているうちに天音の足が左右に大きく開かれ、屹立をスブスブと埋められる。

「やあっ……嘘っ」

蜜で溢れたその場所は、彼を悦んで迎え入れた。柔らかく、彼を包み込む。

「二度目は、もつと長くもつから……失神するほど満足させてやるよ？」

——今でも十分満足してます！

言い返したいのに、天音の口から出るのは、甘えたような喘ぎ声だけだ。

「そうすれば……田舎にいる結婚相手と別れる気になるだろ？」

相手の男と別れる気になるものにも、ないんです。だってそんな相手、いないから！

「そんな気に、ならなっ……！」

快感に抗いながら、必死に言葉を紡ぐ。

すると大輔は、きゅっと眉根を寄せ、「まだ言うのか」とため息を吐いた。

大輔は挿入したまま、天音の蕾を摘まむ。

「ふあっ!?」

びりびりっと電気が全身を駆け抜けたようになって、天音の体が跳ねる。

「——だったら、体にわからせて、その気にさせるまでだ」

ぐいっと両足を持ち上げられて、そのまま大輔の肩に担がれてしまった。

「言えよ、結婚相手とは別れる、俺と結婚するって」

言うが早いか、ずんつと大輔の切っ先が最奥を抉る。

両足を持ち上げられているせいで、今まで以上に奥まで届いてしまう。それにこの体勢だと、彼がナカに入っていく光景が丸見えだ。

その様子はひどく卑猥だった。

天音のナカは、逃がさないというように彼に絡みつく。そして彼は、もつと乱れると言わんばかりに激しく突き立てる。

恥ずかしいのに、その光景から目が離せなかった。

「ほら、気持ちいいだろ？」

昨夜もこうされると悦んでいたと、大輔は低い声でささやく。

「こうされて、もつともつとって啼いていたじゃないか。なあ？」

昨夜の痴態を披露されながら、息もできないほどに激しく突かれて、天音の思考は蕩けていく。

「俺を好きだと言って啼いていたじゃないか。もう一度言ってくれ……」

切なげに見つめられて、天音の胸が疼く。

寿退社するというデマが広がっていくのを、諦めて放っておいた後悔が蘇る。

——ああ、最後までできちんと否定し続けられよかつた……！

「大丈夫。望まない結婚なんてさせない。俺がご両親に話しに行くから」

大輔の決意したような声を聞き、現実引き戻された。

結婚するなんて事実はないのに、思いつめた表情の彼が突然実家を訪ねたりしたら両親と兄夫婦

は「なんじゃそら」と言っつて仰天するだろう。……あまりにも居た堪れなさすぎる。

珍妙で気まずい光景を思い浮かべた天音は、激しく「ダメ！」と叫んだ。

誤解を解かないと大変なことになってしまふ！

天音が慌てて大輔に手を伸ばすと、その手を苦しそうに握った彼が呻く。

「まだ、言うのか……！」

大輔は、天音の膝を折り曲げさせてぐいっと押し、己を深々と突き刺した。

「んあああっ」

「もういい。話を聞く気はなくなった。天音は、おかしくなるほど感じればいい」  
目を眇めて笑う彼は、壮絶に怖くて、色つぼい。

そんな彼に、天音は自分の状況も忘れて見惚れた。天音の視線から、その心情を察したらしい彼は、さらに笑みを深めた。

そして天音は声が哽れるまで啼かされ、あそこが痛くなるくらい突かれ続ける。

最後には息も絶え絶えで、ようやく解放された時には、安堵の涙を流しながら気を失ったのだった。

6

天音は、お腹がすいて目を覚ました。

室内には日の光がさんと差し込んでるので、もう昼近くになるのだろうか。  
時間を確認しようとして、腕以外、動かないことに気が付く。

——下半身が有り得ないほどに重い、こんな疲労感は初めてだ。立てる気がしない。

そんな体調も相まって、もっと寝ていたいと思ったけれど、睡眠を上回る欲求に駆られる。

「お腹すいた……」

眩いた途端、ぐっつと、お腹が呑気な音を立てる。

すると隣から、笑い声と一緒にガサガサという音が聞こえた。

「ああ。だろうと思っただよ。好きな食え」

そう言っただ渡されたのはコンビニの袋。中にはおにぎりや菓子パンが、たくさん入っていた。昨日の夜、天音をお持ち帰りする前に、朝ご飯用に買ったという。

天音は「お持ち帰り」という言葉に過剰反応し、思わず顔が熱くなる。

顔を隠すように少し俯いて袋を受け取りながら、きちんと話をするなら今しかないと思った。

大輔は今、天音の隣で体を起こして枕に背中を預けている。

これまではずっと天音が言いかけるとすぐさま組み敷かれ、話せないほどの快感を与えられてしまった。しかしこの体勢なら、もしも同じ展開になったとしても数秒の余裕がある。

勝負は一瞬。

天音は大輔に遮られないように叫んだ。

「嘘なんです……！！」

さんざん喘がされ、すっかりしゃがれてしまった声で、天音はようやく伝えた。  
ほうっと安堵のため息を吐く天音を訝しげに見ながら、大輔は首を傾げている。

「なにが？」

「だから、あのっ……んんう？」

天音が続きを話そうとしたのに、突然口をふさがれて、強く抱き締められた。

「俺のことを好きだっけって言ったのは嘘だっけって言う気？」

「いや、だからっ——んむっ」

——ええい、人の話を最後まで聞かんか！

いい加減イライラして、腕を伸ばして大輔のうしろ髪を引っ張った。天音は今、空腹も手伝って気が立っている。

「痛っ……！！」

大輔がそう叫び、ようやく離れてくれた。天音はすかさず、逆に大輔を拘束するように彼の腕に抱き付く。

そんな場合じゃないのに、遅い<sup>たぐま</sup>な、なんてドキドキしてしまった。

しかし一瞬で我に返り、大輔の腕が動き始める前に早口で叫んだ。

「結婚するっていうのは嘘なんですっ！」

「——は？」

案の定、大輔は気の抜けた声を上げた。

天音は彼を、そうっと見上げる。

そこには、ぼかんとした表情の大輔。天音を襲おうとする素振りは見られない。

天音はひと息吐いてから、しつかりと言葉にした。

「結婚相手なんて、いません」

すると大輔の右の眉だけが上がって、驚いた顔をする。

「あの、最初から説明するので……説明できなくなるようなことしないで、最後までちゃんと聞いてくださいね」

真実を話そうとするたびに、今までさんざんされたことを思い出し、頬が熱くなってしまう。

そっと大輔の腕を放して、シートに肩までくるまって彼を見上げる。

大輔は訝<sup>いぶか</sup>しげな顔をしながらも、じっと天音を見ていた。

自分の隣に横たわる裸の彼を改めて見てしまい、頬だけでなく全身が熱くなっていく。

思ったよりも筋肉質な体に、視線が吸い寄せられる。

「天音の言うとおり、ちゃんと説明を聞くから、煽<sup>あお</sup>るのは話が終わってからにしてくれ」

「煽<sup>あお</sup>ってません！」

反射的に答えると、大輔は「そう？」と言いなから天音の頬を撫でる。

彼の優しい手つきにうっとりし、自然と笑みがこぼれた。

でも今は、幸せな気持ちに浸っている場合じゃない。天音はようやく、本当のことを最初から説明できた。

——勘違いされてしまったきっかけ、田舎に帰る本当の理由、それから、デマが広がっていくのを、なぜ放っておいたのかも。……恥ずかしいから、誤解した大輔に結婚を祝われたのが悲しくて自暴自棄になったことは伏せておいたけれど。

「とんでもないデマが広がっていると気付いた時には、すでに否定してもまったく信じてもらえない状態になっていたんです」

ため息交じりに呟くと、大輔が呆れた様子で言った。

「それはお前が、気付くのが遅いからだろう」

——ごもっともです。

反論できずに、天音は心の中だけで少し拗ねた。

「そもそも、付き合っている男性もいません」

母が全快したら、またこちらに戻ってきて、派遣会社にお世話になるつもりだと話した。もちろん、派遣会社にもその旨を伝えてある。

「誤解させてしまって、すみません」

シートにくるまったままでは格好がつかないなと思いつつも、ぺこりと頭を下げた。

大輔は返事をせず、なにかを考え込んでいる。

天音は彼が怒っているのかなと思いつき、身をすくませた。

するとチラリと視線が降ってきたので、ぴっと背筋を伸ばす。

「昨夜のあの呑みっぷりは、ヤケ酒だったのか」

——ヤケ酒。そう、ヤケ酒です。デマが広まってしまったこと自体も悲しかったけれど、ずっと好きだった人もそのデマを信じて、祝福されてしまったことでヤケになっていたので。

触れられたくない方向に話がかいそうな空気を察し、逃げたい気持ちを我慢して頷いた。ここぞ妙な行動を取ったら、全部話すハメになる。それは……今さらながら、かなり恥ずかしい。

「そうか……好きでもない相手と、無理矢理結婚させられそうになっているわけじゃないんだな。よかった」

ホッと息を吐きながら呟かれた言葉を聞き、胸が甘く疼く。

彼が自分のことを心底心配してくれていたのだと感じ、温かい気持ちになる。

しかし、そんな風にじーんとしていられたのも束の間。とんでもない羞恥爆弾を落とされた。

「ところで今、付き合っている人はいないって言ったが——俺と天音は付き合っていないの？」

——え！ それって、どういうこと!?

突然の問いかけにフリーズし、返事ができず押し黙る。

これは……むしろ、どう答えるのが正解なのか教えてほしい。昨晚のことをまったく覚えていないため、なんといいのかわからない。

しばらく一人でグルグルしていたら、シートごと体を抱き寄せられる。

「天音？」

甘さを含んだ声に、天音は全身が燃えてしまふんじゃないかと思うほど熱くなる。

「昨夜俺に、好きだ好きだと言って迫ってきたのは本心？」

——まったく記憶にない。

天音の耳元に顔を寄せている大輔は、前髪が落ちていて普段と少し印象が違う。いつも格好いいのに、さらに今の彼はなんだか野性的な魅力に溢れている。

この色っぽい大輔を相手に、昨晚の自分は本当に告白まがいのことをしたのだろうか。

それも信じられないが、深酒をして彼に絡み、質の悪い酔っ払いの世話をさせたなんてことも信じたくない。信じたくはないが……自分の気持ちを伝える云々の前に、まずは非礼を詫びるべきだ。

天音は居住まいを正した。

「すみません……」

今は、とにかく謝ることしかできない。酔っ払いの面倒を見させてしまったのだ。

消え入りそうな声で謝ると、大輔が怒った声を出す。

「そんなことが聞きたいんじゃない」

目を逸らして逃げようとする天音の頬に手を添えて、大輔が聞く。

「昨晚、俺のことを好きだと言っていたのは酒の勢い？ 本気？」

そう聞かれ、ますます後悔の念が押し寄せる。

本気じゃないと疑われるような状態だったということだろう。そんな告白、なかったことにしたほうがマシだ。こんな不誠実な自分は、彼にふさわしくない。彼のが好きだからこそ、ここは潔く身を引いたほうがいい。

「酔っ払いの戯言だと……」

俯いてしまいそうになった天音の顔を、大きな手が挟み込む。

大輔は、誤魔化すのは許さないとばかりに、鼻先が触れ合うほどの距離で見つめてきた。

「天音。俺のこと好き？」

「あ……………う……………」

天音は言葉を詰まらせて、どうにかこの状況を脱せないかと視線を巡らせる。

その様子を見た大輔は、逸らした天音の視線をことごとく追いかけ、目を合わせてくる。そうしてニヤリと口の端を上げ、わざとらしくため息を吐いた。

「そこで口ごもる意味がわからない」

……完全に、からかわれている。

ついさっきまで、大輔は本当に天音の気持ちが変わらず問いかけているのだと思っていた。でも違う。天音の気持ちなんてとっくにわかっていて、言わせようとしているのだ。

天音は少しムツとして、彼の顎をグイッと押し返した。

——こんな状態で、なんで意地悪するかな！

天音は悔し紛れに大声で叫んだ。

「スッピンで、二日酔いで、素っ裸な上に空腹の状態では、本当の気持ちなんて言えません！」

——なんて女心のわからない奴だ！

なかば八つ当たりだ。ブンブンと頭を振って、彼の手から逃れシートに潜り込む。

事の最中に、一度は気持ちを伝えたのだ。改めて言うのならば、綺麗な状態で言いたいには決まっ

ている。決して今ではない。

「なんだそりゃ」

頭上で、笑い声が聞こえた。

彼の笑顔が見たくて、そっとシートから目だけ出す。すると、それに気付いた大輔の腕が伸びてくる。

笑いながら抱き締められて、逞しい胸板におでこがくつつく。

天音の頭の上に、大輔の顎が置かれた感触があった。

「じゃ、とりあえず空腹をどうにかしようか」

つむじに柔らかな感触があたって、キスされたのだと感じた。

天音はムズムズする気持ちを我慢しながら、袋の中からパンを取り出す。

大輔はその間、天音の髪を梳き続けていた。

「服も着たいです……」

「ああ。でも服を着るのは、一緒にお風呂に入ってからね」

「……………はい？」

——なんですと？

思わずポカんと口を開けて、彼を見上げる。

「服を着るなら、風呂に入ってからからのほうがいいだろう？ でも、今の天音は一人じゃ動けない。俺がしっかりと隅々まで洗ってあげるから」

「いやいやいやいや」

「その後、しっかりと服を着せて、まあ、化粧もできるとこまでしてやるよ」

「待て待て」

「天音の気持ちは、その後でしっかりと聞かせてもらおうから」

そう言った時の大輔の笑顔は、さっきまでとは打って変わって天音の見慣れたものだった。

それは仕事前に見かけた——厄介な交渉事を円滑に進める時の、相手に有無を言わせぬ笑顔。つまり、にこやかなのに目が笑っていない、というやつである。

「わかりました。…………じゃあ、ざっくりかいつまんで！」

順を追って、包み隠さず話すのは恥ずかしいから、逃げ道を作ったつもりだった。しかし大輔は首を縦に振らない。

「いや、洗いざらい全部」

天音は、食べようとしたパンを両手に握り締めたまま固まる。すると大輔は、彼女の顎を捕らえて言った。

「一から十まで、すべて聞かせろ。その後はまた…………俺の気が済むまで付き合ってくれるよな？」

——まだする気!?

天音は一瞬、気が遠のいた。

だけど同時に、きつと逆らえないこともわかってしまう。

「お…………お手柔らかにお願いします…………」



その返事に、大輔は満面の笑みでこう答える。  
「もちろん」

——二人を結びつけたのは、最低最悪の勘違い。  
絶対に、叶わない想いだと言っていた。けれど、勢いとはいえ自分の気持ちを伝えられ、彼も同じ気持ちでいてくれたのだと知らされ……思いもよらない幸せを手にした。まったく人生とはわかないものだ。

天音は朦朧とする意識の中、彼の逞しい腕に抱かれながら、そんなことを考えた。

## 第二章 略奪婚？

1

牧戸大輔が天音の上司となったのは、三年前のことだった。

在庫管理や打ち合わせで使う資料作成の手伝い、コピーやお茶汲みといった雑務を担うサポーターとして、大輔が率いるグループに配属されたのが彼女だ。

当時の天音は社会人二年目の二十二歳。若くて可愛い女の子が入ったと、周りが騒いでいたことを思い出す。

その頃の大輔は、新しく編成されたこのグループのリーダーになったばかりで、天音の容姿よりも彼女の仕事ぶりのほうが気になっていた。別な会社で二年間の社会人経験があるそうだがまだ若く、前職はうちとは異業種と聞き、最初は随分心配したものである。しかし天音は、大輔の心配をよそに、なんでもすんなりと器用にこなしていた。

一度聞けば大体のことは理解し、テキパキと仕事を終わらせていく。

ミスはそれなりにあったが、同じ失敗は繰り返さない。

とても素直な性格で、思っていることが表情に表れるタイプである。嬉しい時は素直に喜び、悲